

## 闇に見える

野元 広

先日、「<sup>きり</sup>截金の人間国宝展」を観に行つた。  
JRの明石駅でエッセイ仲間と待ち合わせ、  
会場の明石市立文化博物館へ向かった。明石  
城跡の東内堀沿いの道は冬枯れの芦原の堀と  
土塁の木立越しに時折、白壁の城櫓が見える。  
夜遅く酒に酔つた千鳥足で闇に沈んだ堀か  
ら聞こえる蛙の声などを聞きながら駅から我  
が家へ帰る通い慣れた道だ。照明は明るすぎ  
ることもなく、かといって暗くもなく適度の  
照度が保たれている。ときには江戸時代の堀  
端を歩いているような錯覚も感じる。  
最近できた歩行者と自転車専用のエレベ  
ーターで博物館の高台に出ると、市街地のビル  
の狭間に明石海峡の海のかげらが見えた。昔  
は海も淡路島も行き交う大型船ももつと間近  
にすつきりと眺められた。

会場は鑑賞客で溢れていた。

客の流れは淀んでいる。私たちは顔を見合  
わせ、両隣のメンバーを確認しあつた。  
この展覧会は、一時廃れていた<sup>きり</sup>截金技法を  
復興し、さらに美術工芸として新しい境地を  
切り拓いたふたりの人間国宝<sup>さいた</sup>齊田梅亭と西出  
大三のめつたに鑑賞できない作品展だつた。  
「<sup>きり</sup>截金は金、銀、プラチナ箔を細い線や小  
な三角、四角などに切り抜いて貼り付けて文  
様を現す装飾技法なんです。幼いとき叔父の  
アトリエへよく行つたもんです」  
今日の案内役、エッセイストで神戸大学名  
誉教授の西出郁代さんは言った。  
作品保護のため照度を落とした光に照らさ  
れた作品群。ほんのりと彩色された木<sup>き</sup>地に縫  
い針ほどの細さの金箔を両手の<sup>きり</sup>截金筆で優  
美な曲線に張り付けた線刻や金銀箔の梨地文  
様を施した、管や香合や茶入などが展示され  
ている。どれもこれも繊細で作者の真摯な気  
持ちが伝わってくる。  
私はふと人混みに疲れて、観客の流れから  
抜け出し、誰もいない展示物の前に立った。  
金銀箔で創られた、花園を飛ぶ蝶と花に埋も

れた鼠の截金絵画が目の前にあった。細部をもっと確かめたくなって頭を絵に近づけたときだった。

突然、頭の影になった絵が展示照明に照らされていくときより、さらに煌めき始めたのだ。私は頭の影を絵から外してみる。

絵は明かりに茫々と沈んだ。  
再び影を落とすと、花園はにわかには輝きを  
取り戻し、蝶は舞い、鼠の目は煌めき、微かに  
息づいているように思えた。

私は谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』を思い出していた。この作品は、日本の美学や美意識を充分語っていないから駄文だ、いや、そうではない、名文だ、という賛否両論がある。しかし、私は、へ蝋燭や燈明の醸し出す妖しい光りの中で観る日本の漆器などがその陰翳を計算に入れていくから美しいのだという論には賛成したい。

私は調光した美術館の照明さえ、まだ日本本来の美術工芸品を観るには明るすぎることに

をこの「截金の人間国宝展」で体験した。

かつて日本人は、仄暗い部屋を意識して蒔絵や截金などを施した筥や茶入や漆器やふすま絵等の調度をしつらえ、その中に美しさと心の安寧を感じて生活してきた。しかし、やがて利便さと引き替えにそんな「闇に見える」文化を一つひとつ失ってしまった。

今、日本は東日本震災に伴う福島第一原発問題で揺らいでいる。動機の不純さを感じる節電要請でもあるが、純粹な意味での節電は必要だ。

日本人は忘れかけている日本文化の良さを  
還り見て、もっと節度のある明るさの中での  
生活を取り戻したいものだと思う。